

チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2013年12月8日

(C)河北新報社

10年大地震津波振り返る

「無警戒」悔やむ遺族



【コンステイトゥション 2010年のチリ大地震津波で家族を失った現地の被災者3人が、悲しみと現在（現地時間）の巡回ワーク 承をめぐる日本の語り部とシヨップ「むすび塾」では、の対話に、会場では現地住民も耳を傾けた。

（一面に關連記事） 後にはキャンプをする人が出ないはずだ」と語った。

同市では、市内を流れるマウレ川河口部のオレゴ島にキャンプしていた約50人が津波にのまれて命を落とす。むすび塾に参加した。

息子を亡くしたペドロ・パレイラさん(37)は「ギャ決めていたり、観光客に地が津波にのまれて命を落とす。むすび塾に参加した。

が あったことが分かり、今はキャンプをする人が出ないはずだ」と語った。

同市ではチリ大地震津波後、地震が起きたらすぐに避難という意識が浸透したという。むすび塾に参加した。



津波で大切な家族を失った遺族の体験談に、現地住民らは沈痛な表情で耳を傾けた。コンステイトゥション市

日本の語り部
遺構保存提案

で許してしまった。交通事故 意したりしていた。故などの危険性は考えてい 防炎意識の維持が、これが、津波は警戒していな からの課題になる。語り部 かった」と悔やんだ。

として参加した宮城県南三 陸町の農業後藤一磨さん (66)は「被災した建物を見 孫1人が犠牲になった。地 震後、遺族らが協力して島 には十字架など慰霊碑を建て ずだ。できるだけ残すこと たことについて「十字架を 見れば、過去に大きな被害 保存を提案した。

むすび塾@チリ・コンステイトゥション